

(12) 名前のない新聞 No.226 / 2021 年 11・12 月号

夢を編む その五十四

小 さ 愛 さ

(くうさ かなさ)

高橋 秀夫



ミント←

緊急事態宣言が解除された。真夏日と連呼される季節はずれの空模様の中出された解除宣言。

コロナが終息したわけではないが異常気象とあいまって黄落を待つ林の木々が戸惑っている。マスクを取って家から飛び出す人はなく、やはり人も戸惑っている。

ぼくとして歩くことが少なくなって、往復一キロにも満たない家と店の行き来の日々が相変わらず続いている。行き来の道と言っても公団住宅の整備された何の変哲もない道で、生垣にベニアオイが植えられ、若い桜の木やツツジ、クチナシ、水仙などがあるが何れにしても目を奪う程のものではない。如何にも人工的な風はやめないが、それでも季節を感じさせてくれるから車道よりはいい。

ところが植樹された花木の隙間をよくよく見るとシロツメクサやムラサキツメクサ、ヌスビトハギがぎざぎざと広がっている。何れも植えられたモノではない、芝生が植え付けてあるところからニョキニョキと出てきてるからいつの間にか住み着くようになったのでしょう。どれもみな小さな花ではあるが思わずしやがみ込んで見てしまう。小さな、愛らしい花。足元から歓喜がぼくの中に染み入るようにカラ

ダが喜んでるのがクスクスとわかる。何の変哲もないと思っていた道が楽しいものになったのである。それからはその道をクローバーの道とぼくは呼ぶようにした。

先日、京都堺町画廊で開かれている「山尾三省没後二十年 いまアニミズムという希望を考える」という展示会に行ってきた。

この催しは三省さんの集大成とも言える「アニミズムという希望」(一九九九年に琉球大学での特別講義の講演録)の新装版の出版記念も兼ねて、本の装画と挿絵、三省さんの自筆の原稿、写真、資料を展示し、三省さんの書斎でもある愚角庵の拡大写真が入口にかざられている。コロナ禍で閉塞する世相に的を得た企画で、三省さんが私たちに残した悲願である言葉は正に混沌とする私たちに希望を示唆するものになることでしょう。

新装版の装画、挿絵のふしはらのじこさん(絵本作家であり堺町画廊のオーナーでもある)。解説を書いた山極寿一さん(霊長類学者、人類学者であり、元京大総長である)の両人は屋久島の研究で三省さんとは深い縁のある方で、この新装版はまるで新しい本のように思えた。もちろん、中身は寸分も変わらない三省

さんの言葉。やさしい語り口の中に、一人の詩人の命かながらの言葉、いや言葉が静かに、静かに私たちに呼びかけてくる。

その展示会のイベント(トークと詩の朗読に参加する機会を頂いた。ふしはらのじこさん、山極寿一さん、屋久島から三省記念会の手塚賢至さんはズームでつなげ、ぼくはトークの後に三省さんの詩を朗読させてもらった。コロナの為定員二十人の限定でしたが僅かな時間ではありましたが改めて三省さんとながらうたさんのネットワークに驚きもし、自分もその一筋にいたるのが嬉しかった。その当日、早目に画廊に行き、新装版の本を開いて見ると、二十年前に読んだものなのではないながらページを拾い読みしていたら、ハッと目に飛び込んできた言葉があった。(小 さ、愛 さ)(くうさ、かなさ)と読む)という沖縄の俚言をタイトルにした章。そこには三省さんが屋久島の雑誌「生命の島」に寄せた「小 さ、愛 さ」という自身のエッセイからその俚言の奥深さを伝えている章。

始めにスミレ道と名付けた道でせせらぎを見つめる。

『ひとつひとつの花に声にも言葉にもならぬ挨拶を送りながら歩いていくと、不意とかすかなせせらぎの音が聞こえてきた』。

そして、こう続く。

『白川山のが家の近くでは、昼も夜も激しい音をたてて谷川を流れ下っているから、その音を聞かぬ日ではないが、そのようにささやかに静寂そのものをもたらしてくれる水の流れる無い』。

『無人の林道沿いに不意に現れ出た、「春の小川」という異界だったのである』。

はて、これはぼくが退屈な朝晩行き来してる

道にふと見つけたツメクサやヌスビトハギによつてうれしい道になったことにどこか似てはいるが三省さんのまなざしは更に更に深い。エッセイは沖縄の俚言「小 さ、愛 さ」に及んでいく。

『・その言葉に触れて以来、それは過去の言葉でも沖縄の俚言でさえもなく、ぼく自身の現在と未来を導き示す鍵言葉(キーワード)のひとつとして、深く胸の中に刻みこまれてしまった』。

『小 さ、愛 さ』というと、それは春の小川のほとりに咲くスミレの花のような小さなものを愛(かな)しむことのようなのだが、ただそれだけではなく、じつはぼく達自身の生命の相もまたそのスミレの花と同じく、小さく愛しいものであることを意味していると思う。

一九六〇年代以後の高度経済成長とともに、ぼく達には大きいことは善いことだという幻想がまつわりつき、宇宙制覇という言葉に象徴されるように、人間にできぬことは何ひとつないかのように開発・躍進することを善としてきた。それはそれで人間性の側面であり、敢えて否定することはできないが、その反面においてぼく達は、千年前とも二千年まえとも同じく、この地上において、つまりこの場において生死(しょうじ)していくほかない、まことに小さな生物の一種でもある。

沖縄発の(小 さ、愛 さ)という俚言は、そのことを改めて思い起こさせてくれる深い言葉として、ひとたびそれに触れるや、そのままぼくの胸に深く刻み込まれたのである。』

これからは朝晩のクローバーの道で(小 さ、愛 さ)とつぶやいて歩こうかな。ぼくにも見えなくなるまで、何度も何度も・・・
「うんうん」と新装版のサルたちが言った。